小倉孝誠著『パリの秘密』の社会史

「ウージェーヌ・シューを発見しよう」

ジャンル史と経済史との網の目にシューを捉える

有田英也

外国文学の研究者にとって、ひとりの作家をその心の襞をなぞるように論じる誘惑は、この仕事にまつわる困難が大きければ大きいほど痛感されるものらしい。著者はこれまで文学作品の読解と、十九世紀フランス史への「社会問題」を介したアプローチとをあわせもつ、一連の刺激的な仕事をしてきた。デビュー作となった『19世紀フランス夢と創造』（人文書院）では、フランスの代表的絵入り新聞「イリュストラシオン」を縦横無尽に読み解いて鉄骨建築や温室、パッサージュといった表象文化論の重要テーマを切り出している。このように著者は、文学を語るさいにも「推理小説」「歴史小説」といった、「下位ジャンル」に生じた微妙な変化に注目しつつ、文学史でお馴染みの大作家の代表作に言及してきた。それが今回はウージェーヌ・シューである。それも「あとがき」で、「本書は私にとって、個別の作家に関するはじめてのモノグラフィである」と述べるほどの気の入れようだ。アンリ・ミショーについて語ったジッドのひそみに倣って、ここは「ウージェーヌ・シューを発見しよう」と言ってみたくなる。

第一章「新聞小説の時代」では、対象が小説の「下位ジャンル」である「新聞小説」と位置づけられ、このジャンルの変遷がほぼ一世紀のスパンで通史的に叙述される。フランスでは、十九世紀初頭のスタンホープ印刷機導入に始まる技術革新により、挿絵入り本が流行した。だが、挿絵入り本には多額の初期投資が必要だから、リスクを冒して成功した出版社の陰で、出版・流通・販売を一手に引き受ける小規模の書籍商が没落していった。このあたりの叙述はデパートと小売店の関係にも、鉄道輸送と行商の関係にも適用できそうである。こうして出版社は絵になる話の書ける作家を探し求めた。ウージェーヌ・シューが『パリの秘密』を新聞連載した一八四二年から翌年は、作家が反響次第で法外な稿料を稼げる時代の幕開けだった。やがて新聞小説は第二帝政下で検閲時代を迎えるが、一八六〇年代になるとガボリオのような大衆作家がジャーナリズムの手法を取りこんだ「司法小説」で成功し、コナン・ドイルの祖となった。このように、著者はジャンル史と経済史との網の目にシューを捉えようとした。

もう一組の縦糸と横糸は、本書にふんだんに盛られた当時の挿絵および章ごとの梗概に対する、著者による社会史的なコメントである。著者がやや啓蒙的な叙述を選んだのは、次のような理由による。十九世紀フランスの大ベストセラーであるシューの『パリの秘密』は、ちょうど一世紀前の明治三七（1904）年に邦訳されており、その後、二種類の抄訳を経て全訳（江口清訳、集英社、1971）が出た。著者によれば、抄訳とはいえ武林無想庵も関根秀雄も、「下層民や犯罪者たちの習俗を描写した風俗小説としての次元に注目した」。登場人物のサラをさよ子、トムを東馬、サン＝ラザール監獄を聖羅座監獄（武林無想庵訳）として、日本の読者を物語の世界に連れ去る仕掛けが施されていた。だが、これらの抄訳は、「物語のエピソードは訳すが、その合間あいまに挿入されている社会的言説や理論は排除していく」。それゆえ著者は、排除された「社会問題」と、それを「問題」として切り出す思考を浮かび上がらせながら、これを小説の情景に織りこんで作品を解いていくのである。

たとえば、シューはパリの監獄を描写しながら雑居房をやめて独房に切り換えるよう主張した。「腐敗した者たちを集めれば、彼らの堕落はいっそうひどくなり、矯正できなくなるということに気づくのに、数世紀も要したとは！」ここで著者はもちろんフーコーの『監獄の誕生――監視と処罰』に言及するが、他方で、一八三〇年代初めに『アメリカの民主主義』を著わしたトクヴィルが、そもそもアメリカの監獄制度を視察しに渡米したことに注意を喚起する。同時代テクストを読みあわせる著者は、ピセートル精神病院のくだりで、医師エルバンの陰に、患者を鎖から解放した実在の精神科医フィリップ・ピネルを見てとる。

ただし、入門書としての制約から、ピセートル精神病院が貧しい老人の養護施設で、かつまた死刑囚が刑の執行を待つ場所でもあったことを第三章「『パリの秘密』の情景」で知った読者が、第四章「『パリの秘密』の社会史」でシューの死刑反対論を読むまで、少し間延びしてしまうのが惜しい。書評子もそうしたのだが、この本を種本に使おうという向きには、人名索引の余白に事項索引をお作りになるよう勧めたい。

（成城大学文芸学部教授／フランス文学・思想）

▼小倉孝誠著『パリの秘密』の社会史――ウージェーヌ・シューと新聞小説の時代』2・20刊、四六判三一四頁・本体三二〇〇円・新曜社

連載(15)

海の時計

第一部　末松正樹のパリ

ふるさとは遠くにある時、また帰れない時、より強くノスタルジアの火を燃やす。旧制高校の二年であった吉田秀和は、友人に誘われて東松原の吉田一穂の家を訪ねている。その思い出は鮮やかである。

「一穂さんの『故園の書』を手にとって、下宿で拾い読みしている間、私はこれを、いわば、大都会に出た北国の詩人の体験したもののカタログのように思った。ここには、大正から昭和初年にかけてのいろいろな社会思想、ことにアナーキズムの大きな影と、それからおそらく氏が何度も通ったのであろう築地の新劇の舞台から触発されたドイツ表現主義文学の発想が実に多く見出される。あるいは同じドイツの表現主義映画『カリガリ博士』のそれ。黒と赤の、革命の文学と文学の革命」。

吉田秀和が一穂に惹かれていった理由の一つは、中学生活を小樽で四年間過ごしていたからである。

「あの凍りついた雪の上を踏む靴の感触、雪の白さ、風の非情な冷たさ、それから雪どけの早春の波と空と遠く見える海岸の淡い緑のイメージなどは、いまも、私の中から消えていない。だが、それが私にとってどういう意味があるかということ、それを思うことは、私には、吉田一穂さんと切りはなすことのできないものになっている」。

吉田秀

ふるさとは遠くにある時、また帰れない時、より強くノスタルジアの火を燃やす。旧制高校の二年であった吉田秀和は、友人に誘われて東松原の吉田一穂の家を訪ねている。その思い出は鮮やかである。

「一穂さんの『故園の書』を手にとって、下宿で拾い読みしている間、私はこれを、いわば、大都会に出た北国の詩人の体験したもののカタログのように思った。ここには、大正から昭和初年にかけてのいろいろな社会思想、ことにアナーキズムの大きな影と、それからおそらく氏が何度も通ったのであろう築地の新劇の舞台から触発されたドイツ表現主義文学の発想が実に多く見出される。あるいは同じドイツの表現主義映画『カリガリ博士』のそれ。黒と赤の、革命の文学と文学の革命」。

吉田秀和が一穂に惹かれていった理由の一つは、中学生活を小樽で四年間過ごしていたからである。

「あの凍りついた雪の上を踏む靴の感触、雪の白さ、風の非情な冷たさ、それから雪どけの早春の波と空と遠く見える海岸の淡い緑のイメージなどは、いまも、私の中から消えていない。だが、それが私にとってどういう意味があるかということ、それを思うことは、私には、吉田一穂さんと切りはなすことのできないものになっている」。

がらせながら、これを小説の情景に織りこんで作品を解いていくのである。

たとえば、シューはパリの監獄を描写しながら雑居房をやめて独房に切り換えるよう主張した。「腐敗した者たちを集めれば、彼らの堕落はいっそうひどくなり、矯正できなくなるということに気づくのに、数世紀も要したとは！」ここで著者はもちろんフーコーの『監獄の誕生――監視と処罰』に言及するが、他方で、一八三〇年代初めに『アメリカの民主主義』を著わしたトクヴィルが、そもそもアメリカの監獄制度を視察しに渡米したことに注意を喚起する。同時代テクストを読みあわせる著者は、ピセートル精神病院のくだりで、医師エルバンの陰に、患者を鎖から解放した実在の精神科医フィリップ・ピネルを見てとる。

ただし、入門書としての制約から、ピセートル精神病院が貧しい老人の養護施設で、かつまた死刑囚が刑の執行を待つ場所でもあったことを第三章「『パリの秘密』の情景」で知った読者が、第四章「『パリの秘密』の社会史」でシューの死刑反対論を読むまで、少し間延びしてしまうのが惜しい。書評子もそうしたのだが、この本を種本に使おうという向きには、人名索引の余白に事項索引をお作りになるよう勧めたい。

（成城大学文芸学部教授／フランス文学・思想）